

■J.シュトラウスⅡ／皇帝円舞曲 Op.437

ワルツはウィーンという都市の盛衰を彩ってきたジャンルである。ヨーゼフ・ランナーやヨハン・シュトラウスⅠの整えた形式に則って、様々な機会にコンサートで聴くためのワルツを作って人気を博したのがヨハン・シュトラウスⅡ（1825-1899）である。1889年、ベルリンに新しいコンサートホールが建ち、こけら落としで演奏するための曲を委嘱することになった折にも、ワルツ王シュトラウスⅡに依頼が舞い込んだ。当時の新聞によれば、初演時の曲名は「手に手をとって」。これはプロイセン国王ヴィルヘルムⅡとオーストリア＝ハンガリー帝国の皇帝フランツ・ヨーゼフⅠが同席する予定になっていたからで、両国の親善を象徴する意味が込められていた。その後、出版時に現在の曲名へと変更されたという。

曲全体はワルツの定型に添って、序奏とコーダの間に小さなワルツが4つ、連結された形式である。序奏は「ゆっくりとした行進曲のテンポで」、八長調、2分の2拍子。当時の新聞では弦楽器の刻みがプロイセンの軍隊風だと評したのもあったようだが、実際、遠くから軍隊が近づいてくるような雰囲気である。独奏チェロによる静かな楽想で締めくくられ、第1ワルツに続く。典雅なメロディでゆったりと始まる第1ワルツは八長調、二部形式。さらに高音域に新しい楽想が現れて盛り上がる。第2ワルツは変イ長調で二部形式。これも優美な2つの楽想が反復される。力強い導入部に続く第3ワルツは八長調、二部形式。弦楽器の艶やかな音色が際立つ前半の楽想と、管楽器が中心となった力強い後半の楽想の対比が特徴。ごく短い導入部が入って第4ワルツはヘ長調で三部形式となる。ニュアンスたっぷりの刻みで始まる楽想が主部の主題。中間部はなめらかに跳躍するメロディを繰り返す。再び主部の旋律が戻って、コーダとなる。第1ワルツが再現され、第3ワルツの楽想で高揚していくが、ホルンの楽想が入り、チェロの独奏が第1ワルツを静かに回想する。フルートが一節奏でると、一気呵成に音量が増して終結する。

白石美雪

楽器編成：フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、トランペット、
トロンボーン、ティンパニ、スネアドラム、ドラム、ハープ、弦五部

※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。